

大航海時代の構図

増田 義郎

大航海時代再考

コロンブスがアメリカ航路を、ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路をそれぞれ発見し、マゼランが最初の世界一周航海をなしとげた、といったぐあいに話を始めたのでは、大航海時代の意味を正しく掴み取ることはできないだろう。それではまるで、ヨーロッパ人の世界拡大が一方的に始まったようにしか聞こえない。大航海時代は、世界史的な必然性があったからこそ始まったのである。そして、その必然性を理解するためには、コロンブス以前の、いやポルトガル人の西アフリカ航海以前の歴史を知る必要があるのだ。

大航海時代が始まるまでのヨーロッパは、ユーラシア大陸の西端に閉じこめられた弱者だった。フェルナンデス・アルメストが言うように、15世紀はじめまでの世界で、大航海時代を開く可能性をいちばん持っていたのは中国人であった¹⁾。ヨーロッパ人の大航海時代の発端を、1415年のポルトガル人による北アフリカ、セウタ攻略に求めるのは、おそらく間違っていないだろう。この年の前後から、ポルトガル人は東大西洋の探検航海を盛んにおこなうようになり、手始めにまず大西洋の島々に進出した。マデイラ諸島の占拠は1418年から1425年の間におこなわれ、アソーレス諸島は1427～1432年にポルトガル帰属が確定した。その間に西アフリカ沿岸の探検航海が進められたが、最初の目標であるボジャドール岬回航が達成されたのは、1434年である。しかしわれわれが思い出さなければならないのは、まさにこの期間に、インド洋においては、明の永楽帝が派遣した鄭和の大遠征航海が、7回にわたっておこなわれていたという事実である。鄭和が、62隻、2万7000人を率いて第一次航海に出発したのは、セウタ攻略の10年前の1405年であり、ポルトガル人が貧弱な小

舟でやっとボジャドール岬にたどりつく1年前の1433年には、アラビアや東アフリカ海岸までも遠征している。

どちらが優勢かは、火を見るよりも明らかであった。それから65年後の1498年に、ガマのインド航海がおこなわれた。彼が4隻総計500トン弱の小さな船隊で、現地で雇用したイスラムのパイロットに頼って、インド洋を渡り、マラバール海岸のカレクーに到着したとき、それは現地の人々になんの衝撃も与えなかった。3000トン級の主力船を60隻あまりも連ねた鄭和艦隊にくらべれば、まるで取るに足らない小規模な船隊にすぎなかったからである。ところがそれ以後急速に力の均衡状態に変化がおり、西が東に深く侵入する時代が始まったのである。なぜこのような状況の逆転が起こったのか。

この問いに答えるためには、1415年以後のヨーロッパ人の探検航海について再検討するとともに、その前史をさぐらなければならない。

ポルトガル人の航海

セウタ攻略からガマのインド航海までの83年の期間は、厳密にふたつの時期に分けて考える必要がある。

ポルトガルは、はじめからアジア進出を考えていたわけではない。彼らの目的はふたつあって、まず西アフリカの有力な商品、とくに黄金、香料、象牙そして奴隷などの産地に、北アフリカのイスラム商人の手を経ずに直接到達すること、つぎに当時アフリカの奥地にいると信じられていたキリスト教徒の王、プレステ・ジョアン（プレスター・ジョン）を発見することを意図していたのである²⁾。ポルトガル王アフォンソ五世は、1455、1456年に出された教皇勅書により、ボジャドール岬以南のアフリカ沿岸地方に対する諸権利を保有することを認められ、また他のいかなるキリスト教徒も、同地方で“サラセン人”と交易をおこない、航海、漁業活動をおこなうことを禁じられた³⁾。この独占事業を推進するため、ポルトガル人は、1482年、西アフリカ黄金海岸（現ガーナ）に城砦サン・ジョルジェ・ダ・ミナを建設し、強力な根拠地とした。した

がってこのころまでに、探検の第一目標はほぼ達成されたと言ってよい。ところがその5年後、ある事件が起こって状況が一変した。

ポルトガル人たちは、第二の目標、すなわちプレステ・ジョアン王の探索にも熱心であったが、1485ないし6年に、ジョアン二世は、西アフリカのベニン地方を探検していたアフォンソ・アヴェイロから、内陸約300レグア（約1700キロメートル）の地点に、キリスト教徒と思われるオガネーという王がいるらしい、という報告を受けた。そこですかさずジョアン王は、ティンブクトゥ、タクルル、モスイなどの地方に探検隊を派遣するとともに、バルトロメ・ディアスにアフリカ南西岸の探検航海を命じた。これが1488年の喜望峰発見につながったわけだが、同時に陸路アフォンソ・デ・パイヴァ、ペロ・デ・コヴィリヤンの二名に、プレステ・ジョアン宛の書簡を持たせて、アデン経由アフリカに派遣した。パイヴァは、アデンからエチオピアに入り、キリスト教王を発見したがまもなくして死亡した。コヴィリヤンはインドからカイロまで旅行し、そこでパイヴァの死を知って、国王宛の報告書を発信してから、じぶんもエチオピアに入った。彼は海路インドに達することが可能であるむねを王に書き送ったらしい⁴⁾。

こうした状況下で、ジョアン王は、アフリカ南端を回航してインド洋に入ることが可能だという確信を持つことができた。そこで、1488年以後、ポルトガル人は従来の目標を一部変更し、インド洋到達を意識しながら探検航海をつづけることになった。ところがそれから4年して、晴天の霹靂のように、コロンブスに率いられたスペインの小船隊が、西回りでインディアス（アジア）に到達したという報せが伝えられて、ポルトガル人たちを驚かせた。ただし、ジョアン王は冷静さを失わなかった。彼は、北大西洋で嵐に遭い、スペイン帰国に先立ってリスボア港に避難してきたコロンブスを王宮に招いて詳しい報告を聞いた結果、スペイン人たちが到達したのが、アジア大陸の東端にすぎず、インドや香料諸島のような重要地域ではないことを知ったからである。ジョアン王は急いでインド航路発見のための探検船団を派遣しようとはしなかった。一説によると、コヴィリヤンその他からの報告に接して、アフリカ内陸経由で

陸路インド洋に進出する可能性に魅力を感じていたからだともいう。そのうちジョアン王は1495年に没してマヌエル王が立ち、ようやくヴァスコ・ダ・ガマの船団が派遣されたのは、1497年7月になってからであった。

ガマは11月18日、喜望峰を回り、試行錯誤でアフリカ東海岸を沿岸航海してから、ミリンデ（マリンディ）からインド洋を横断し、1498年5月20日インド、マラバール海岸のカレクー（カリカット）に着いた。現地のサモリン（領主）から受けた対応は屈辱的であり、土地のヒンドゥ商人からも馬鹿にされた。おまけにサモリンから出港税を要求されたがそれを踏み倒して脱出するありさまだった。しかし、帰国して、現地で安く購入した香料が莫大な利益をあげたので、マヌエル王は、ガマがカレクーで調査したインド洋の状況から判断して、大砲で制圧して現地の香料等の貿易に割り込む決意を固め、1300人をのせた13隻の大武装船団を翌年派遣した。

こうしてポルトガルは、本格的にインド洋圏の政治と貿易に介入することになった。

コロンブス航海の意味

今日、一般に、コロンブスはアメリカ航路の発見者とされている。しかし、そう理解しては彼の航海の歴史的意味を掴むことはできない。彼は、1492年におこなった第一回航海で、インディアスに到着したと考えた。インディアスとは今日のインド亜大陸ではない。ほとんどアジアと同義の広い概念である。いろいろなインディアがある。だから複数で呼ばれたのである。そしてコロンブスは死ぬまでインディアスの概念に固執した。つまり、じぶんはあくまでインディアス航海者であると信じていたのである。

コロンブスのインディアス概念を理解するのにいちばん便利なのは、エンリクス・マルテルスが1489年ごろ作製した世界図である。この地図は、中東まではおおよその地形を示しているが、それから東はたいへん空想的である。インド亜大陸は小さく描かれ、その東に「黄金の岬」が示されているが、これは

マレー半島を反映していると言われる。その東にはシヌス・マグヌス、すなわち「大きな湾」があり、それを東から大きく包み込んで、赤道のはるか南まで達する大半島が描かれている。これはまったく空想的な地形である。この半島の付け根あたりに「東インディア」という文字が記され、その上に「マンジ」とあるが、これは蛮子の対音であり、江南地方を指す。そしてそのはるか北に「キタヨ」が示されているが、これはキタイ（契丹）から出た語で、中国北部をあらわす。「東インディア」のさらに東の海は多島海であり、その中にシバングすなわち日本があることになっている。

コロンブスはそもそもなにを目標に航海を企てたのであろうか。彼が1492年4月16日付けでイサベル、フェルナンド両王と交わした協約書には、インディアスとかアジアとかの具体的な地名はいつさいでてこない。金を探すとか香料を買うというようなこともなにも書かれていない。協約書の内容は非常に簡単である。要するに、カトリック両王は、コロンブスを発見する「すべての島々と大陸」の提督、副王、総督に任じ、「そこで購入し、交易し、見だし、取得し、またはそこに存在する、真珠、宝石、金、銀、香料その他すべての種類、名称の商品」からあがる利益の十分の一を与え、あとの十分の九は王室のものとする、と規定しているのである⁵⁾。

ここで気が付くのは、王たちが、べつに征服せよとか掠奪せよと言っているわけではなく、なにか交易や取引を念頭においているらしいことである。そして、第一回航海の日誌の中でコロンブスがたびたび繰り返しているのも、大きな船や商人たちのいる港に早く行きたい、という願望である。もちろん金とか香料とか真珠などの商品についても熱心に情報を集めているが、べつに金だけに固執していたわけではない。

コロンブスの航海日誌と称せられるものは、実は彼の書いた航海日誌そのものではない。バルトロメ・デ・ラス・カサスというドミニコ会士が叙述した日記体の記録の中に、ところどころコロンブスのものと日誌を引用した、いわばラス・カサスの著作である。そして、金の探索が強調されているのは、むしろラス・カサスが書いた部分においてであって、コロンブスの引用文ではもっと

冷静で、「インディアス」がいろいろな産物に富むことが強調され、取り引きや貿易の可能性が大きいことが繰り返されている。

ここで思い出されるのは、コロンブスが、所持していたマルコ・ポロの東洋旅行記に記したマルジナリアである。彼はいたるところでアジアの文化と商業の豪華さ、豊かさに驚嘆しているが、中でも中国南部の港市の繁栄についてはひじょうな注意を払っている。たとえば元代最大の港市泉州の章で、「この港にはインディアから商品を積んだ無数の商船が入港し、インディアからキリスト教徒の国に香料を運びアレクサンドリアに入港する1隻分に対し、ここには100隻が入る」というくだりに、「注意！」と書き込んでいる⁶⁾。

要するにコロンブスの頭の中にあっただのは、中国をはじめとするアジアの海の殷賑をきわめる港市とその商業であったようだ。

おそらくコロンブスの航海のシナリオは、まず黄金のシパンゴに行って金を大量に手に入れ、それから中国その他のアジアの港に赴き、香料、絹その他、当時のヨーロッパで渴望されていた商品を大量に仕入れて莫大な利益をあげる、ということだったのではなかろうか。そして、シパンゴでの黄金の入手には、彼自身が経験した西アフリカでの取り引き方法を考えていたようである。というのは、西アフリカで金と交換するために用いられたビーズ玉などのガラス製品、真鍮の腕輪や首飾り、赤いボンネット帽などを船に積んでいったからである。

コロンブスが「インディアス」に着いて、北緯24度から南緯10度までの海域を探検航海しながら、つぎつぎに目の前に現われる未知の土地の形状を、どのように彼の頭の中にあっただけの世界図と突き合わせ、それと対応させていったかは、かならずしも明らかでない。しかし残されたわずかの史料によるかぎり、コロンブスはいつも当時のインディアスの図像から離れられなかったようである。はじめて根拠地を作ったエスピョラ島では、奥地に金鉱のあるシバヨという地名を聞いてシパンゴの訛りではないかと考えたし、1494年4月から約4週間にわたってキューバ島南岸を沿岸航海したときには、すでに東アジアの大陸部のマンギ（南中国）に到達し、もうすこし進めば「黄金の岬」

に着くと考えた。ところが第三航海で、トリニダー島から現ベネスエラ海岸のオリノコ河口までくると、例の東インド大半島にぶつかったと考え、第四航海では、それを突き抜けて「大きな湾」に通ずる海峡を探索して、現ホンデュラスのグアシア岬からパナマのベラグア地方まで沿岸航海をしている。その理由は、香料諸島が「大きな湾」の中にあると信じられていたからである。

要するにコロンブスは徹頭徹尾アジア航海者だった。アジア、アフリカ、ヨーロッパの古い三大陸観の中で動き回っていた中世人だった。その意味では、彼はヴァスコ・ダ・ガマとおなじ土俵の上で相撲を取っていたのである。いやコロンブスだけではない。1492年から1520年までの航海者や地図製作者の大部分は、みな意識的にはアメリカをアジアに重ね合わせて考えていた。このことは、1519年に、コロンブスと同じように、西回りで香料諸島に行こうとしてセビリャを出帆したマガリャンエス（マゼラン）についても言える。彼は、インド大半島の海峡が、コロンブスが探したよりずっと高緯度にあると考え、マゼラン海峡を発見したわけだが、その後の航海で「大きな湾」が途方もなく広い大洋であることを知った。しかし地図製作者の大部分は、うろたえることなく、大きな湾を大きな海に書き替え、従来通りの観念に従って世界図を描き続けた⁷⁾。

ところがマゼランがスペインを出港したのと同じ年、キューバ島の植民者フェルナンド・コルテスが、偶然発見された大陸本土の未知の都市文明の探索にでかけ、メキシコ中央高原でメシカ（アステカ）王国を発見してこれを征服する。そのとき以後、新世界インドの概念が、従来の三大陸観に割り込んできて、ヨーロッパの世界像に革命的な変化がおこり、それからの世界史の動向も大きく変りはじめるのである。

ユーラシア大陸の横断路

コロンブスが、1492年の第一回航海から1506年の死にいたるまで、アメリ

カをアジアと信じつづけていたのは、別に異常な偏執者だったからではない。彼がインドに捉われていたのは、15世紀のヨーロッパ人として至極あたりまえのことだった。アジアに対する深い関心は、なにもマルコ・ポロやその影響をつよく受けたコロンブスに限らず、ヨーロッパ人すべてのものだったのである。ヨーロッパだけでなく、地中海世界の人々は、有史以来、つねにアジアに目を注いでいた。というのは、アジアは、西方世界では絶対に産出、生産されない貴重な物資が満ちあふれて交易される夢の世界だったからである。

アジアの特色ある物産が、いつごろから交易網に乗って流通しはじめたのかはよく分からない。よく張■が西域を開拓してシルク・ロードを開いたなどといわれるが、実際にはそれよりはるかに古く、地中海世界、イラン、インドと中国をつなぐ道が、ターリム盆地のオアシス民の中継によって、開けていたと考えられている。ギリシャ人は絹を産する遙か東方のセレス人のことを知っていたし、アレクサンドロスの軍隊は、インドで同じ情報を得ている。また、西域特産の軟玉やトルコ石が殷周時代から中国で装飾の材料とされ、アッシリアやバビロニアに運ばれていたことも、ユーラシアを貫く交通路が古くからあったことを示している。しかし、東における秦漢帝国の成立、西におけるローマ帝国の台頭によって、絹の道はその輪郭を明確にしたのである。

中国を起点にして概観すれば、絹の道は敦煌から三つに分かれ、ハミを経由する天山北路、楼蘭からカシュガルに向かう天山南路、ターリム盆地の南辺を西に向かい、ホータン経由でカシュガルに達する西域南道となる。天山南路は、テレク峠を越えてサマルカンドにいたる道と、南進してバクトリアの主邑バルフに達する道、およびギルギット経由でインド北部に出る道の三本に分かれる。この道は結局インド洋につながる。サマルカンドから先は、カスピ海の南を通して、バグダード経由でレヴァント地方に出る道と、バクー経由黒海に出る道のふたつに大別される。

このように、東西トルキスタンのオアシス地帯を貫く絹の道の北に、遊牧民の住むステップ地帯を貫通するいわゆるステップ・ルートがあった。これは、モンゴリア、ジュンガリア、カザフスタンを通り、カスピ海の北を抜けて黒海

北岸のドン川河口に達する道である。古くからギリシャ人は、黒海貿易のカウンターパートであるスキタイ人を通じて東方の貴重な産物を入手していた。この貿易で、絹とともに重要だったのは、シベリア森林地帯の動物の毛皮、とくに貂皮であった。ギリシャ人は紀元前7世紀から黒海貿易でこの貴重品を手に入れている。中国でも、紀元前6, 5世紀から、貴人たちが最高の奢侈品として貂皮を珍重している。いずれもこれは、ステップ遊牧民の仲介によってもたらされた、シベリアの狩猟民の産物である。

以上の陸の横断路とともに忘れてはならないのは、南の海のルートである。すなわち中国南部から、インドシナを経てインドに至り、さらにペルシャ湾、紅海を通じて地中海に至る海路である。南シナ海とインド洋というふたつの大洋がその根幹となった。この海の道は、陸のユーラシア・ルートと無関係ではなかった。それどころか、両者は密接に相関して、互いに影響を及ぼしあい、東西世界の経済・文化的関係のネットワークを作り上げていったのである。

インド洋＝南シナ海世界

地球の表面積は約5億1000万平方キロメートルあるが、その70.8パーセントの3億6106万平方キロメートルは海であり、陸地は29.2パーセントにすぎない。世界に三つの大洋があるが、そのうち最大の太平洋は、面積1億6525万平方キロメートルで、地表総面積の約35パーセントにあたるから、全陸地面積をしのぐ。それにつぐ大西洋は、面積8244万平方キロメートルで、地表の約24パーセントにあたる。第三のインド洋は、面積7340万平方キロメートルで、地表の約22パーセントを占める。

古代から15世紀、つまりヨーロッパ史でいえば中世末まで、歴史の舞台になったのは、インド洋である。大西洋は空白の海であり、その東部において沿岸航海がおこなわれ、北部でヴァイキングが活動するにすぎず、アフリカ人もヨーロッパ人もアジア人も、南北アメリカ大陸の存在に気が付いていなかった。太平洋には、先史時代に東南アジアから小舟で移住してきたアウストロネ

シア系の住民がオセアニアの文化を創ったが、孤立して世界の他地域にほとんど影響を及ぼさなかった。

インド洋は、アフリカ東岸、インド亜大陸、マレー半島、スマトラ、オーストラリア西岸などによって区画される海であり、古代における先進地帯インドを中心に、アフリカ、東南アジア、南アジアの沿岸各地の特色ある産物の交換と交易が発達していた。

インド洋の東には、面積約450万平方キロメートルの南シナ海がある。面積こそ小さいが、この海は、中国という経済、文化の一大中心をひかえ、東南アジア諸地方を経由してインド洋世界と古くから結びつき、ほとんど一体をなしていたから、むしろインド洋＝南シナ海圏として、ひとつのユニットに扱ったほうがよい。しかも、秦漢帝国にはじまる中華帝国の発展にともなって、南シナ海の比重は時代とともに増していったのである。

インド洋＝南シナ海世界の東の方から見てゆくと、中国では、戦国時代（前403～221年）に南海、すなわち南シナ海や東インド諸島への関心ははじまっている。南海に関する記述が中国史料に現われてくるのは、前漢武帝の時代、すなわち紀元前2世紀の後半だが、それより古く、戦国時代から、中国人は、現在の広東、広西州にいた越族を通じて、南海から、犀角、タイマイ、ヒスイ、真珠、宝石などを得て愛用していたという。したがって、紀元前221年、秦の始皇帝が天下を統一したとき、いわゆる嶺南の地を攻略して、南海、桂林、象の三郡を設け、南海郡の首都として番禺（いまの広東）を定めたのも、南海貿易を重視したからだと考えられる。

秦滅亡後、嶺南三郡は独立して南越国を称し、漢に形式上服属したが、武帝のとき、その拡大政策のため滅ぼされた。最近おこなわれつつある王墓の発掘によって見ても、ひじょうに豊かな財宝と物質文化を持つ国であったことが明らかである。武帝はその地に嶺南七郡を置いたが、そのうち三郡は北ヴェトナムにあたる地方であった。当然中国人と南海諸地方との直接接触が盛んになり、やがて中国の史書に東南アジアの地名が現われはじめる。ただし、専門家によれば、これは中国人が大挙して南海、インド洋に進出したということでは

なく、貿易の主体はインドシナ、マレー半島、インドなどの住民であったろうという⁸⁾。漢代の史料によれば、真珠、タイマイ、象、犀角、銀、銅、木綿布などが中国に輸入され、金および絹製品が輸出されたが、やがて輸入品目の中に香料が加わり、大きな比重を占めるようになる。

インド洋＝南シナ海世界の流通世界に、地中海の住民たちも早くから強い関心を寄せていたことは、ヘロドトス、アリアノス、ストラボン、プリニウスなどの著作から明らかである。アレクサンドロス大王は、インド洋に注目し、部下を派遣して海路を探検させた。ヘレニズム時代には、エジプトに成立したプトレマイオス王国も、レヴァント地方からメソポタミア地方にかけて成立したセレウコス王国も、アジア貿易を盛んにおこなった。

プトレマイオス朝の成立とともに、アレクサンドリアに多くのギリシャ人が移住し、ギリシャ文化の中心は本土からそこに移った。ギリシャ人たちは、早くから紅海経由のインド洋貿易に関心を持ち、紅海沿岸にいくつかの重要な寄港地を建設して、アフリカ東岸のガエルダフィ岬まで進出し、インドやアラブの商人と接触して、インド洋＝南シナ海世界の貴重な産物を入手したのであった。エジプトのギリシャ人の海外貿易に対する関心は、紀元1世紀なかばに書かれた『エリュトラ海案内記』において具体的にみることができる。

紀元前1世紀に、新興勢力ローマがセレウコス朝を滅ぼし、シリアはローマの属州になった。プトレマイオス朝は紀元前30年、クレオパトラ七世の自殺によって滅び、エジプトはローマの穀倉となった。ローマはすでに地中海のライバル、カルタゴを滅ぼしていた。紀元117年にはアッシリアを属州とし、ローマの版図は最大限に達した。国の強大化とともに、支配階級がふくれあがり、奢侈品に対する欲望も高まって、ローマ人たちの目は、インド洋＝南シナ海世界、東方世界に注がれることとなった。そこには、インドの香料、木綿、宝石、真珠、東アフリカの象牙、犀角、中国の絹製品、生糸、東インド諸島の香料などをはじめとして、染料、タイマイ（ベッコウの材料）、珊瑚、樟脳、黒檀、椰子、オウム、蜜蠟、貝類、竜腦など、地中海地方では入手できない品物が交易されていた。ローマ人は、バクトリアのクシャン王国と親善関係を結

んで中国との通商を計ろうとしたが、パルティアとしばしば争って、東への陸路を確保しにくくなったので、いきおい海路を利用するようになった。すなわち、バクトリアに陸路運ばれる中国産の絹などを、インドのグジャラット地方の港で受け取り、海路紅海経由でエジプトに送ったのである。ストラボンの伝えるところによれば、アウグストス皇帝の時代（前27～後14年）には、1年に120隻もの商船が、紅海西岸の港を出て、アフリカやインドに向かい、その中にはガンジス河口まで達するものもあったという。

画期的なのは、モンスーンの利用がはじまったことだった。インド洋では、夏は南西から、冬は北東から吹く季節風があり、これをうまく利用すれば航海は容易になる。ティベリウス皇帝の時代（14～37年）にギリシャ商人ヒッパルスがこれに気が付いて、はじめて紅海入り口からインダス河口まで直接航行した、というので「ヒッパルスの風」と呼ばれるようになった。モンスーンを利用すれば、インド南端のコモリン岬を回航し、マレー半島に直航することも可能になる。やがてローマ人は中国にも姿を現わした。『後漢書』によれば、166年、桓帝のとき、インドシナ経由で大秦王安敦あんどんの使と称する者が洛陽に到着した。大秦とは、ローマの東方属領またはローマ帝国自体を指し、安敦は当時の皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスであろうと言われる。はたしてほんとうにローマから派遣された使節か、それとも詐称か、たしかなことは不明だが、持参した贈品が、象牙、犀角、タイマイと、ローマではなくインド洋の産物である点是否定の材料にはならない。というのは、ローマ人は、人に自慢できるような貴重品、珍品を地中海世界に持っていなかったからである。

ローマ人は、中国の絹やインドの宝石、香料などを懸命に求めた。ところがそうした奢侈品を購入するためにローマ人が供給できる商品は、ガラス製品、ブドウ酒、オリーブ油、奴隷などしかなく、高額を支払いに応ずるには、貴金属をもってするほかはなかった。そこでローマ人が征服によって集めた金銀は東方貿易のため湯水のように費やされた。プリニウスは、ローマの上流階級が東洋の奢侈品を求めると大量の金銀が失われている、と嘆いている。ローマ帝国末期の悪性インフレーションや悪貨の鑄造は、インド洋＝南シナ海世界へ

の貴金属流失がひとつの原因になっていたとさえ言われる⁹⁾。

インド洋＝南シナ海世界は、物産ゆたかで、中国はローマとは比較にならないくらい富裕な経済的先進地域であった。この世界では、地域間貿易が古くから発達して、自足した経済圏が形づくられていた。したがって、地中海世界と関係は持ったが、そこに積極的に進出しようとする意欲はなかった。それに対して地中海世界は、インド洋＝南シナ海世界の富と物資を羨望し、絶えずそれを求めた。というよりはそれを必要とした。漢＝ローマ時代以後も両者間のこの関係は基本的なものとしてずっとつづく。このことは、のちの大航海時代の諸現象を理解するためにもたいへん重要である。

海路通商の意味

陸の絹の道と海上の通商路の関係は、時代時代によって変化している。一口で言うて、前者は、民族の移動や対立によって、時として通行困難になることがあるのに対し、後者はほぼ一貫して使用可能であった。ローマ帝国が東方進出を意図しながら、パルティアやササン朝ペルシャによってそれを阻まれたため、陸路よりも海路を重要視するようになったことはすでに述べた。唐代(618～907年)にはいって、積極的な西域政策が取られ、高宗の代に唐軍は西突■を下し、一時はペルシャに接する地方まで支配下に置いた。しかし、安史の乱(755～63年)以後政治が乱れ、節度使すなわち地方軍閥が跋扈しただけでなく、西域の吐蕃やウイグルに圧迫される日がつづいた。そこで陸の絹の道はだんだんと重要性を失い、代わりに海路による通商が盛んになってきた。これにはイスラムの勃興が関わっている。

唐王朝の成立とほぼ同時期に、西ではイスラムが興った。本来のアラブは遊牧民であり、海や航海とは無縁であったが、シリアやエジプトの沿岸に出ると、海上に乗り出した。そして、つぎの段階として、インド洋に進出してきたのである。これはやがて地中海よりはるかに重要であることが彼らにも分かった。750年にアッバス朝が興ると、都をダマスカスからバグダードに移したた

め、ペルシャ湾岸の諸港と連絡がつきやすくなり、多くのイスラム教徒たちがインドや中国に旅立った。当時の東方貿易に関しては、地理学者や商人、航海者の体験談を集めた本がいくつかのこっており、彼らの航海の実態を知ることができる。その中の一冊『シナとインドの物語』（別名『スレイマン物語』）は日本語に翻訳されている¹⁰⁾。

ペルシャ湾の港から、商船はまっすぐインドのマラバル海岸に向かい、サランディープ（セイロン）島経由でマレー半島のカラ（クラン、またはケダー）に着く。そしてマラッカ海峡を渡って、インドシナのチャンパに寄港し、最後に広東に着くのである。マラバル海岸から広東まで、約3ヵ月かかったという。こうしたイスラム商人の中国進出は、7世紀末から始まっており、広東、揚州には大きな彼らの居留地もできた。イスラム商人は^{タージー}大食と呼ばれ、その中からは多くの大富豪が出て巨万の富を貯えたという。

唐朝の勢力が衰えて、黄巢の乱が起こったとき、広州はその犠牲となって、大食人、ペルシャ人、ユダヤ人などが多数惨殺され、その財貨が掠奪された。西においてもそのころアッバス朝は衰退期に入り、イスラムの海上通行も退潮に向かった。イスラム商船はマレー半島以东には向かわず、そこで中国船と接触して交易をおこなうのが常態となった。

唐滅亡後、五代（907～960年）から宋代（960～1279年）にかけて、また新しい情勢が起こった。

まずイスラム世界では、アッバス朝が勢力を失い、946年、カスピ海の西南ディラム山地に興ったブワイフ朝がバグダードに入って、実権を握り、カリフは名目的な存在となった。しかしこのシーア派の王朝の覇権も1世紀あまりしかつづかず、1055年、トルコ人のセルジューク朝に滅ぼされた。そして10世紀の半ば以後は、イラクの衰退にともない、エジプトがイスラム勢力の中心に立ちはじめた。

エジプトは、当時トルコ系のイフシード朝の支配下にあったが、弱体で、969年、チュニス¹¹⁾のファーティマ朝に滅ぼされた。ファーティマ朝はフスタートの近くに首都カーヒラ（カイロ）を建設し、シリアに軍を進め、1059年に

はバグダードを占領した。ファーティマ朝を支えたのは海外貿易だった。つまりイラクの実力低下につけこんで、バグダードからペルシャ湾を通してインド洋に入る通商路に対抗し、カイロ、フスタートを起点とする紅海ルートによってインド洋＝南シナ海の貿易に参加したのである。そこで11世紀以後は、紅海ルートがインド洋から地中海への主要な道となった。これは、ファーティマ朝について興ったアイユブ朝（1169～1250年）、マムルーク朝（1250～1517年）の場合もおなじことだった。

エジプトは古代以来豊かな農業国であり、エジプトを制する者は地中海世界で優位に立つことができたが、11世紀以後のインド洋貿易の支柱となったのは、西アフリカの金であった。いわゆるスーダンの金の起源はよく分からないが、かなり古くから開発されていたことはたしかである。モロッコやチュニジアのイスラム商人は、隊商を組んでサハラ砂漠を渡り、金を手に入れた。11世紀中におけるニジェール川沿岸の都市、いわゆる「黄金のティンブクトゥ」の発展は、黄金貿易によるものであった。エジプトからも、チャド湖経由でスーダンに向かう隊商路が開かれていた。古来、地中海側のインド洋貿易のために、金は欠くことのできない要素であった¹¹⁾。

東西貿易の変貌

この間に、東でも、大きな経済的変貌がおこりつつあった。

まず唐末期から五代にかけて、貿易輸出品の中に陶磁器の占める比率が大きくなり、宋代になると、絹製品を上回るようになった。そのころになると、ペルシャのアストラバッドやギランで優良な絹が産出されるようになり、これが地中海世界に輸入されて、ビザンツ帝国ですぐれた絹織物の生産がおこなわれたので、依然ほど絹の需要が大きくなったのであろう。そのかわり、宋代に輸出された陶磁器は驚くべき量にのぼり、南海では香料を得るための交易で、金、銀、絹とともに陶磁器が用いられるほどであったという。また、12世紀にファーティマ朝とともに滅んで廃墟となったエジプトのフスタートから

は、大量の宋の青磁、白磁が出土している。しかもその多くが最良質の製品である、と研究者は言っている¹²⁾。

また13世紀はじめから、南海の香料の中国輸入が急増するが、これは宋の都市生活の発展と関係があろう。

宋代の海外貿易の活況は、大型船舶が作られるようになったこと、唐末にはマレー半島までしか行かなかった中国の商船がインド西海岸まで通うようになったこと、『諸蕃志』や『嶺外代答』のような詳細な貿易・地理書が編纂されたこと、外国貿易港が増加したこと、など、いろいろなところに現われている。『諸蕃志』には、インド洋だけでなく、モロッコ、シチリア、ムラビトなど地中海世界までの広い世界を視野におさめ、また驚くべき多様な貿易品目を挙げている¹³⁾。市舶司を置く外国貿易港が数を増したことは、貿易量の増加を反映しているのだろう。南宋時代には、広東にかわって泉州が栄え、多数のアラビア人、ペルシャ人が居住したというが、その繁栄は元代まで持ち越され、マルコ・ポロの目を驚かせたのである。

対外貿易の大成長は、宋国内経済の繁栄を前提としている。実際、諸生産の向上、コークスの使用による鉄の増産、交通機関の整備、流通経済の発達、商業都市の成長、農村における商品作物の開発とそれに伴った貨幣経済の浸透などに見られるように、宋代は、経済高度成長期であった。とくに南宋時代に、それまで南蛮の地として軽視されていた華南地方の開発が進み、品種改良、二毛作制の採用などにより、農業生産が飛躍的に向上した意味は大きかった¹⁴⁾。

さらに、宋が北方民族の圧力に苦しめられ、遼、金などに包囲されて、陸上ルートが困難になったことも、海上貿易が盛んになった一因であった。そしてこれは単なる一時的現象ではなく、後の13世紀のモンゴル時代を除けば、貿易通路としての内陸アジアの地位は11世紀以後低落の一路をたどるのである¹⁵⁾。

ここで付け加えておかねばならないのは、元代(1271~1368年)にはいつてからも、海外貿易の盛況は持続したことである。モンゴルはもともと草原の遊牧民族であったが、中国を制するとすばやく海事に関心を示し、水軍を組織

し、商船団を傘下に置いて、海上帝国となった。マルコ・ポロは、イル汗国の王に輿入れする元の王女に付き添って、南海経由でペルシャに行き、帰国するが、当時のインド洋＝南シナ海世界の盛況を興味ふかく描きだしている。

とにかく、紀元 1000 年以後、インド洋＝南シナ海世界の貿易は未曾有の発展時代にはいった。それによって沿岸地方にも変貌と発展が起こったことはいうまでもないが、地中海世界にもその影響があらわれ、まずファーティマ朝の繁栄に、そしてつぎに、第一次十字軍の結果生まれたイェルサレム王国の経済にそれを見ることができる。

地中海世界の変貌

11 世紀は、地中海世界でも変動の時であった。ファーティマ朝がエジプトに進出した。ノルマン人が地中海に侵入して南イタリアのビザンツ勢力を一掃した。セルジュック・トルコがはじめて地中海世界に姿を現わし、1071 年小アジアのマンジカルト（マラーズギルド）でビザンツ軍を撃破し、また同じ年イェルサレムを占領した。そして、1096 年第一次十字軍がレヴァント地方を襲った。これらの激動は、東地中海世界に破壊や戦乱をもたらしたが、同時に経済的活性を与えた。

十字軍の東地中海侵入とともに台頭したのがいくつかのイタリア港市である。それらは、従来小規模な沿岸貿易に従事する小さな都市にすぎなかったが、10 世紀から遠距離貿易を開始し、地中海のイスラム勢力と対峙した。はじめ積極的だったのは、ジェノヴァとピサであり、やがてアドリア海のヴェネツィアがそれにつづいた。ジェノヴァとピサは、ファーティマ朝がマグレブ地方からエジプトに進出してのちの空白状態に付け込んで、1034 年アルジェリアのボナ（現アンナバ）を、1087 年にはチュニジアのマーディーアをそれぞれ占領した。これによってイタリア人たちは、シチリア海峡の制海権を確保したのである。

ヴェネツィアは 11 世紀にすでにコンスタンティノーブルやエジプトと交易

活動にはいていたが、大国ビザンツの強い影響下にあつて、自由に貿易活動をのばすことができなかつた。アドリア海、オトランド海峡、エーゲ海、小アジア、マルモラ海などの沿岸のビザンツ領の港市での貿易には、高い関税を払わされていた。しかし、ノルマンの地中海侵入が契機となつて、ヴェネツィア の発展が始まつた。ノルマン人は、シチリアを占領してギリシャ人を追い出し、イタリア南部やバルカン地方に兵を進め、やがてコンスタンティノーブルに矛先を転じようとした。頭領ロベール・ギスカルの急死によってそれは阻まれたが、ビザンツはノルマン人の進攻に抵抗するための海軍力を持たなかつた。そこで皇帝アレクシオス一世（在位 1081～1118 年）はヴェネツィアの援助を求めた。ヴェネツィアは高い代償を要求して受け入れられた。それは、地中海、エーゲ海におけるビザンツ統治下のすべての港における関税の免除であつた。ヴェネツィアは約束を守つて数次にわたりノルマン艦隊と交戦して戦果を収めた。ノルマン人たちは 1085 年にバルカン半島から撤退した。

これらイタリアの港市が大発展を開始するきっかけとなつたのは、1096 年に始まる十字軍遠征であつた。第一回十字軍は陸上でレヴァント地方に渡つたが、その補給には船舶を利用しなくてはならなかつた。またアンティオキア占領後、エルサレムに向かつて十字軍の輸送と補給はジェノヴァ船団が担当した。第二次以後の十字軍は、輸送、補給でジェノヴァ、ピサ、ヴェネツィアに大きく依存した。イタリア人たちはこれによって利益をあげるとともに、エルサレム王国が成立すると、商業的特権を受けて、レヴァント地方における貿易に機会を求めた。

2 世紀にわたる十字軍運動は、レヴァントにおけるキリスト教徒の宗教・軍事活動であるに止まらず、イタリア人を中心とした地中海キリスト教徒商人が東方貿易に積極的に参加する機会でもあつた。イスラム教徒は敵だから商売の相手にしない、という考え方はあまり通用しなかつた。折しもインド洋＝南シナ海世界の商業交易活動が最高潮に達した時期であつた。シリアやエジプトの商人のもとには、東方の奢侈商品が続々と流れこんできた。イタリア人はこれを見逃さなかつた。

レヴァント地方のセルジューク人は分裂して効果的な抵抗をすることができなかった。したがってイスラム教徒の先頭に立って十字軍と戦う力を持つのはエジプトだけだった。しかしファーティマ朝は内紛に明け暮れしていた。結局エジプト救援のために駆け付けたダマスカスのザンギー朝の将軍シルクーの甥サラディン（在位 1171～1193 年）がアイユーブ朝を興し、果敢な反攻を開始して、イェルサレム、ダマスカスを占領し、アッバス朝のカリフからシリアの支配権を認められた。このように、イスラム教徒の先頭に立って戦ったエジプトですら、キリスト教徒との商売を拒まなかった。インド洋＝紅海ルートの貿易輸入品をさばくことは、エジプトの死活問題だったからである。ポスト十字軍時代のマムルーク朝においても事情は変わらなかった。

東方の商品の地中海へのルートはいろいろあった。ファーティマ朝以後のエジプト王朝が重要視した紅海ルートは、アデンからジッダに航海し、そこからさらにスエズに直行するものと、ジッダから陸路隊商によってダマスカスに出て、そこからレヴァント地方の海岸にいたるものとのふたつがあった。港の中ではアクレがもっとも重要で、1291 年マムルーク朝エジプトに占領されるまで、イタリア商人がここで香料その他の商品を買付けた¹⁶⁾。アクレ陥落後、にわかに重要性を持ったのは黒海、アゾフ海における貿易だった。ここは、オアシス・ルートの衰退後重要性を増したステップ・ルートの終着駅であり、ステップの遊牧民が北方の狩猟民から手に入れる貴重な黒貂の毛皮がここに到着するのだった。と同時に、ペルシャのホルムズからの道もここに通じていた。ペルシャのイル汗国はイスラム化したが、マムルーク朝と対立しており、紅海ルートに対抗するため、オルムズータブリーズートレビゾンドのルートを維持したのである。香料などインド洋の物産のほかに、ペルシャ産の絹、織物、薬、染料、真珠なども扱われた¹⁷⁾。

エジプトは十字軍時代にはキリスト教徒の敵国であったから、安易に接近はできなかったが、それでもさまざまな状況下で貿易はおこなわれた。アイユーブ朝時代には、イタリア商人は自由にエジプト国内を旅行できた。マムルーク朝の前半バフリ時代には、デルタ地帯にしか住むことを許されなかった。第七

次十字軍（1248～1254年）ではフランス王ルイ九世がカイロを攻撃しようとしたので、イタリア商人たちはアレクサンドリアから追放された。しかし、ヴェネツィア人は1254年にスルタンと協定を結んで、貿易を再開している。そして、1345年には、教皇の許可のもとに、有利な通商協定を結び、紅海からの香料を買い付けて、ヨーロッパで独占販売するようになり、ひじょうな利益をあげた¹⁸⁾。

注目すべきことは、イタリア商人たちが、キリスト教徒であるにもかかわらず、戦略物資をイスラム側に少なからず売り込んでいる事実である。さすがに武器の輸出は名目上はありえなかったが、造船、造兵のための物資、たとえば木材、鉄、銅、ピッチなどが、イエルサレム王国経由で堂々とエジプトに売り込まれた。これらの物資はエジプトでは産出されなかった¹⁹⁾。

ヨーロッパ側に輸出品目の変化が起こりつつあったことも注目される。それまでのインド洋貿易では、地中海側にはろくな産物がなく、貴金属で代価が支払われる場合が多かった。しかし12世紀以後になると、ヨーロッパ産の毛織物の輸出が目立ちはじめた。これはフランドル地方を中心とした毛織物工業の発達によるものである。12世紀のヴェネツィアに毛織物を輸出していた生産地としては、フランドル地方だけでなく、アミアン、ボヴェ、トゥルネーのフランスの地名や、イタリア、カタルーニャなどの地名も明らかにされている。カタルーニャの船は、優良なイギリスの羊毛を購入するため、サザンプトンに航海している。ヨーロッパの毛織物商品は、レヴァント地方だけでなく、西アフリカにも輸出された。他方、ヨーロッパの産業の発達に伴う都市人口の増加は、それまで王侯貴族や高位聖職者だけに限られていた東方の香料や絹織物などの奢侈品の需要を拡大し、商業にいつそうの活気を与えた²⁰⁾。

地中海におけるイタリア人、およびそれより小規模なカたちでの南フランス人、カタルーニャ人などの経済活動が、このようにヨーロッパの他の地方にも波及し始めると、地中海と西ヨーロッパの交通路も開けた。最初に通じたのは、アルプス越えの陸路であったが、やがてジブラルタル海峡を通過して大西洋に至る海の道が開かれた。しかしそれは突然開けたのではなく、長年にわたる

ジェノヴァの北アフリカにおける戦略の展開の結果として可能になったものである。すなわち、1087年のマーディーア占領後、ジェノヴァは1161年モロッコ王国と通商協定を結び、ブージュに進出した。そしてさらに西進してセウタに至り、1162年にはジブラルタル海峡を越えて、西北アフリカのサレーに達した。これらの要衝をおさえることによって、ジェノヴァは西アフリカの金、奴隷貿易をおこなうイスラム商人たちと交渉を持った。1291年、ジェノヴァのベネデット・ザッカリーアが、モロッコ海軍を破り、北アフリカ西部における制海権を確保した。そのころすでにジェノヴァ船のフランドル地方進出は始まっていたが、1317、1318年に、ダルディ・ベンボの率いるヴェネツィア船団がブルージュに航海した。その結果、レヴァント地方から黒海、エジプトからフランドル地方に至る広い地域がイタリア商人の活躍の場となり、それがさらに北ヨーロッパのハンザ同盟の通商網とつながって、相互に刺激を与え合った²¹⁾。

こうして、インド洋＝南シナ海世界の大きな経済成長が、12世紀以後の地中海経済に強い衝撃を与え、アルプスの彼方の西ヨーロッパの生産と商業に刺激を与えたことは、明らかであろう。「当時のヨーロッパの航海者や商人たちは、同時代に南方の海でおこりつつあったことのミニチュア版を、地中海において作りつつあったのだ、」とウィリアム・マクニールは言っている²²⁾。ただしこれは、地中海世界や西ヨーロッパが、インド洋＝南シナ海経済圏にその一部として単純に組み込まれた、ということではない。11世紀ごろから、ヨーロッパ内部においては、農業生産や都市の商業活動、手工業、文化活動など各分野で、新しい自律的なダイナミズムが誕生しつつあった²³⁾。それが東方世界と直接に接触する地中海世界のキリスト教徒の強い刺激をうけて、だんだんと加速化していったということであろう。

大西洋に向けて

ジェノヴァやヴェネツィアの大西洋への動きは、西ヨーロッパの市場への接

近であったが、同時にそれは、13世紀に地中海世界でおこった新しい情勢に対する反応でもあった。新しい情勢とはオスマン・トルコの侵入である。

セルジューク朝が、1307年モンゴル軍のため滅ぼされたあと、小アジアに乱立していたトルコ人の小国家の中からオスマン朝があらわれた。ビザンツと戦って小アジアの要衝を押さえ、1345年にははじめてヨーロッパに渡って、バルカン半島の政治に干渉した。1402年、アンカラの戦いでティムールに破れたが、やがて立ち直って、メフメト二世（在位1451～1481年）のもとに、1453年コンスタンティノープルを攻略して、東地中海に覇を唱えた。

ビザンツ帝国の弱みにつけこんで東地中海で羽をのばして活動していたイタリア人たちにとって、オスマン帝国の登場は大きな痛手だった。当然東地中海におけるヴェネツィアやジェノヴァの商業活動は制約をうけ、オスマンと交渉せねば商売はつづけられなかった。1463年から17年間、ヴェネツィアはオスマンと戦い、1479年和睦したが、ネグロポンテ、レムノスを失い、オスマン領内で貿易を続行するため毎年1万ドゥカードを貢納しなければならなくなった。ジェノヴァはすでに1395年、ティムールのタナ破壊によって黒海貿易に痛手をうけていたが、1461年、オスマンの黒海沿岸地方征服によって、決定的な打撃をうけた。

このような情勢下で、イタリア人たちの目が西に向きはじめたのは当然である。ヴェネツィアもトリポリ、チュニス、アルジェ、ボネ、オランなど、北アフリカ諸港との貿易をおこない、またフランドル船団を定期的に送っていたが、なんといってもマムルーク朝のアレキサンドリアとの香料貿易という切札を握っていた。しかしそういうものを持たないジェノヴァにとっては、東地中海での損失を償う血路を見いだすことは至上命令であったろう。

ジェノヴァの関心のひとつは、西アフリカにおける金貿易であった。といってもこれはジェノヴァ人が直接おこなうのではなく、イスラム商人の媒介を通じて取引するのであった。モロッコのフェズ、マラケシュ、チュニジアのカイルワン、チュニスなどから隊商がサハラ砂漠を越えてニジェル川流域に行き、交易によって得た黄金を得る。それをジェノヴァ商人がマグレブ地方の港で買

い付けるのである。金を得るための主要商品は塩と毛織物であった。前者は北アフリカの岩塩が用いられた。そして毛織物を供給したのはジェノヴァ商人だった。ザッカリーアがモロッコ艦隊を破ったその年、ジェノヴァのヴィヴァルディ兄弟が、ジブラルタル海峡を越えて西アフリカの沿岸航海をおこない、行方不明になった。この航海については不明な点が多いが、西アフリカの金産地に直接迫ろうとした探検航海ではなかったかとも言われる。世紀が改まって1312年には、ランチェロット・マロチェロというジェノヴァ人が、西アフリカ航海をおこない、カナリア諸島にまで至っている。これらの事実は、ポルトガル人が1415年以後西アフリカの探検航海を開始するずっと以前から、ジェノヴァ人がアフリカ航路に関心を持っていたことを示している²⁴⁾。

ジェノヴァの関心を西に向けさせたもうひとつの理由は、ヴェネツィアとの闘争であった。12世紀以来、地中海の利権と商業をめぐる、両者はほとんど絶え間なく争っていた。1353年から1355年にかけてはげしい戦争がおこなわれ、1378～1381年にいわゆるキオツジャ戦争がおこなわれたが、ヴェネツィアの喉元にあるキオツジャを制圧したジェノヴァ艦隊を、ヴィットリオ・ピサーノ指揮下のヴェネツィア艦隊がラグーンのなかに封じ込めて奇跡的な逆転勝利をおさめた。そのとき以来、レヴァント貿易におけるヴェネツィアの優位は動かしがたいものになった。ジェノヴァの地位は低落し、また内部的にも内紛が絶えず、強国ミラノとフランスの間に板挟みとなって、1528年にアンドレア・ドレアが独立を回復させるまで、政治的従属国として甘んじなければならなかった。そこでその間に、ジェノヴァの資本や海事関係の技術が、イベリア半島に逃避移転しはじめた。たとえばアラゴン王国は、14世紀末の経済危機に、ジェノヴァの金融資本家の援助をうけている。おとなりのカスティリヤでも、12世紀以来、ジェノヴァ商人や銀行家がセビリヤ、コルドバ、カディス、ムルシアなどに住んで、スペイン国王から特権をさずけられ、経済的実力者として隠然たる勢力を張った。

ジェノヴァの海外進出の中でもとくに目立つのは、ポルトガルにおける活動である。ポルトガルは13世紀半ばに国内のイスラム勢力の駆逐に成功してい

たため、スペインよりも早くから大西洋とアフリカに関心を向けることができた。セウタの攻略（1415年）や15世紀前半における大西洋の島々の領土化は、スペインに数十年先駆けた海外進出である。そして、これらの行動の背後には、いつもジェノヴァの手がはたらいていた。ポルトガルの海事に対する関心は、ジェノヴァ人のそれと一致していた。そこで14世紀中に、ペサーニャ、コッタなどのジェノヴァの商會がポルトガル王と協約を結び、造船、商船の航海、貿易などのために資金と技術を提供し始めた。フィレンツェのバルディ商會もこれに加わった。そこで、大西洋の島々の経営や、西アフリカ各地での交易などには、いつもイタリア人、とくにジェノヴァ人の資本が加わって重要な役割を果たしていた。なかでも強力な力を発揮したのはサン・ジョルジョ商會であり、マデイラをはじめとする大西洋の島々におけるサトウキビ栽培とサトウの生産に出資して成功を収めた。ポルトガル人が西アフリカからビアフラ湾に進出し、フェルナンド・ポー、サン・トメなどの島々を占拠したときも、ジェノヴァ人は、アフリカ人奴隷を使うサトウの生産をおこなわせ、また奴隷貿易にも出資して大きな収益をあげた²⁵⁾。

イベリア半島のもうひとつの国スペインにおけるイタリア人の経済活動も、国家の運命を左右するような大きな力を持っていた。15世紀の後半、カスティリヤのイサベルとアラゴンのフェルナンドの共治する国として統一されたスペインの国家財政は、莫大な戦費のため、慢性的な赤字に苦しんでいた。それを埋めるための借金を提供したのは、ユダヤ人とイタリア人であった。王たちは、借金の担保として徴税権を彼らに与えた。つまり、国家財政は完全に彼らの手に握られていたわけである。ジェノヴァ人コロンブスの夢のような航海計画の資金調達で主要な役割を果たしたのは、フランシスコ・ピネリというジェノヴァの商人であった。そして、コロンブスの「発見」後も、ジェノヴァはアメリカ大陸との通商、鉱山などの経営にも出資して、利益を追求した。カルロス一世の時代（1516～1556年）にはフッガー、ヴェルザーなどドイツの銀行家の影響力が強かったが、1550年代に没落すると、またジェノヴァの経済力が支配的になった。1595年に、スペインに駐在するヴェネツィアの大使

ジョヴァンニ・ヴェンドラミンは、1530年以後、アメリカ大陸から8000万ドゥカードの金銀がスペインに輸入されたが、そのうち2400ドゥカード、つまり約30パーセントがジェノヴァ商人のふところにはいった、と本国宛に報告している²⁶⁾。

大航海時代の構図

インド洋＝南シナ海世界の国際経済の衝撃が地中海におけるイタリア人の商業活動を生み、その力がイベリア二国を通して大西洋に噴出したのが大航海時代であると言ってみちがちなだろう。もうすこし詳しくいえば、つぎのようになろう。

大航海時代のひとつの背景として、11世紀以後の地中海のイタリアたちの商業活動が、アルプス以北のヨーロッパ世界に強い刺激を与え、そこで12世紀以後独自の経済社会的な発展があったことは重要だが、それにともなって、ヨーロッパ・キリスト教圏が12世紀以後、宗教を旗頭に拡大を開始したことなども考慮に入れなければならないだろう。11世紀の十字軍運動に始まり、13世紀のイベリア半島におけるレコンキスタの進展、チュートン騎士団のエルベ川以東への進出、そして14世紀に始まったロシア人の「タタールの軛」に対する戦いなど、いずれもそのような拡大運動を代表していた。ポルトガルの海外発展も著しく宗教的な性格をそのひとつの特徴としていた。しかも、ポルトガル人がはじめてインド洋に進出した当時は、その地域におけるイスラム勢力が衰退期にあったことも、ヨーロッパ人にとっては有利な条件であった²⁷⁾。

大航海や海外活動は、ポルトガルやスペインの単独の事業ではなかった。経済的に見れば、両国とも貧乏国家だったから、彼らの海外事業を支えたのは、イタリア人やドイツ人、ユダヤ人などであった。ドイツでは、銀山の好景気に乗って、フッガー、ヴェルザーなどの金融商人が全ヨーロッパに経済活動の網の目をはりめぐらしていた。資本提供ということだけではなしに、経営技術の

面からいっても、イタリア人の貢献は大きかった。信用による貿易、為替手形や信用状による支払い、国際的銀行業務、商業における合名会社、組合の設立、外貨交換のシステム、海事保険、簿記、などが商取引において確立されたのは13世紀以後のイタリアにおいてであった。これらの商業技術は、16世紀はじめまでにポルトガルやカスティリヤの商人も身につけ、その世紀中にフランスやイギリスにも入った²⁸⁾。

ヨーロッパが国を越えた商業技術を共有するようになり、商取り引きのネットワークを発達させ、国際市場が形成されたことは、大航海時代の発展にとって有利であった。14、15世紀において重要な国際市場はフランドル地方のブルージュであり、インド航路発見以後ポルトガルがもたらす東洋の香料もそこで取引された。そしてブルージュにおいて、ハンザ同盟のもたらす、北ヨーロッパの産物・商品とイタリア人がもたらす地中海やインド洋＝南シナ海世界の産物が出会ったのである。ブルージュにおいてとくに重要だったのは、毛織物の生産だった。これが中部ヨーロッパや地中海世界、さらにはアフリカやアジアに輸出されて、国際市場にヨーロッパを参入させる原動力となった。そしてここでもイタリア人の媒介の意味が大きかった。

ポルトガル人をはじめとするヨーロッパ勢力のインド洋浸透を可能にしたひとつの因子に、軍事的なものがあつた。封建制という戦士文化が支配したヨーロッパにおいて、軍事関係の技術的進歩は速度が速かった。元来は中国で発明された火薬が西漸すると、地中海世界で火器が発達した。はじめは鍛鉄の束を溶接して作られそれゆえ暴発の危険が大きかった大砲の砲身が、15世紀のなかばから、ヨーロッパで青銅または真鍮の鑄型によって製作されるようになってから、戦術が一変した。陸戦ではもちろんだつたが、海戦でも革命的な変化がおこつた。それまで地中海における海戦では、快速のガレー船が使われ、船首の衝角で敵船に突っ込んでから、乗り移って斬り合いの戦闘をおこない、勝負がきまつたが、15世紀以後は砲撃戦が主体となつた²⁹⁾。そして舷側が低く軽量なガレー船では大砲を積むのに向かないので、カラベラ、ナオといった新しい型の船舶が発明された。これは、地中海のイスラム型の船と北海のヴァイ

キング型の船の折衷から生まれたと言われ、100トンから200トンていどの大ききだったが、外洋航海や大砲積載に向いており、十数隻の船団を組めば、当時のインド洋でこれに対抗できる相手はいなかった。ポルトガルのインド洋進出を阻止するため、マムルーク朝のスルタンが紅海から派遣した大艦隊が、1509年2月、インドのディウ沖で、数においては劣勢なポルトガル艦隊に撃破されたことはこれを証明した。

地中海世界やヨーロッパが2000年間求めてきた垂涎の世界が、ヴァスコ・ダ・ガマの航海を契機として、直接手にどどくものになったとき、大きな歴史の歩みの転換がおこりはじめた。ポルトガル人にすぐつづいて、スペイン人、イギリス人、オランダ人などがインド洋＝南シナ海世界に船隊を送り、その伝統的な地域間貿易の中に割り込んできた。たしかにこれは大きな事件だった。

インド洋＝南シナ海世界は、古くから中国を大きな重心として発展してきたが、中国の比重は10世紀以後決定的になった。K.N.チャウドリは、インド洋＝南シナ海世界のアイデンティティは、中国に由来するとすら言っている³⁰。そこで、新しいヨーロッパ勢力が加わって変貌したインド洋＝南シナ海世界の構造は、ジョージ・ブライアン・ソウザにならって、中国を中心とした次のような三つの同心円を描くことによって図式化できるだろう³¹。

まず第一に、中国南部を中心として、南シナ海の西限から日本までを含む円を描く。第二の円は、東アフリカまでのインド洋を含む。第三の円は、北および南大西洋に及び、西ヨーロッパを含む。第一の円内では、中国のジャンクが支配的な力を持った。それに、日本人、ヨーロッパ人、中国への「朝貢国」シャムを含むアジアの他の国々の活動が展開した。第二の円内では、アジア、ヨーロッパの商人が活動し、ヨーロッパの「会社」の貿易がおこなわれた。第三の円は、喜望峰を越えてアジアとの交易をおこなうヨーロッパの国々の競合の場であった。

しかしここでどうしても問題にしなくてはならないのが、新たに「発見」されたアメリカ大陸の意味である。アメリカ大陸は、はじめインディアス、すなわちアジアと考えられた。当時のヨーロッパ人にとって、世界はヨーロッパ、

アジア、アフリカの三大陸から成るのは自明の理であった。「インディアス」がアジアとはちがう未知の大陸であることは、なかなか理解されなかった。しかし、16世紀前半に、アステカやインカのような高度に発達した文明がアメリカ大陸に発見され、マゼランの航海によって太平洋という巨大な海が存在が明らかになったとき以後、「インディアス」が中国ともインドともちがう新しい世界であることを、人々はだんだんと認めないわけにゆかなくなった。アメリカ大陸が、ヨーロッパ人の世界像の中にすこしずつ割り込んでゆく過程を、メキシコの歴史学者エドモンド・オゴルマンは「アメリカの発明」と呼んだ³²⁾。スペインのイエズス会士ホセ・デ・アコスタが1590年にセビリヤで刊行し、ヨーロッパの諸国語に訳された『インディアス自然道徳史』³³⁾は、そのような「発明された」新しい世界としてのアメリカ大陸を科学的に記述した最初の書である。

それではアメリカ大陸はヨーロッパに対してどんな意味をもったのだろう。

一口で言って、アメリカ大陸はそれまでのヨーロッパには考えられなかったような巨大な富を差し出したのである。

スペインは、はじめアメリカ大陸文明の貴金属収奪に専心したが、1540年代に上ペルー（ポリビア）とメキシコで大銀山が発見されてからはその開発に全力をあげ、1560年ごろから、水銀アマルガム法の導入によって大增産期に入った。ヌエバ・グラナダ（コロンビア）では金山が開発された。これらの金銀の大部分はヨーロッパに運ばれた。ポルトガル領のブラジルの海岸地方では、早くから東大西洋諸島から移植されたサトウキビが大農園で栽培、加工され、製品は大部分ヨーロッパに送られて、その経済に大きな影響を与えた。銀や金の生産のために、メキシコ、ペルーでは、もともと豊かな原住民の低廉な労働力が使われ、サトウ生産地域では、ポルトガル人が輸入するアフリカからの奴隷に頼った。奴隷貿易もヨーロッパ人に富をもたらした。17世紀末にブラジルでゴールド・ラッシュがおこり、ポルトガル王は世界中でもっとも富裕な王となった。

17世紀から18世紀にかけて、イギリス、オランダ、フランスなどの後進勢

力がカリブ海に侵入して、小アンティル諸島、ジャマイカ、バルバドス、トリニダー、サン・ドマングなどに足場を作った。はじめタバコ、インディゴなどの栽培が試みられたが、やがてサトウキビの栽培とサトウの生産が始まり、折り返しからヨーロッパで紅茶やコーヒーの流行が始まってサトウの需要が急増していたため莫大な利益を生むことになった。サトウキビ栽培とサトウ生産はアフリカ人の奴隷の労働力によっておこなわれたから、ここでも大西洋奴隷貿易が収益をあげた。サトウについては西インド綿が重要だった。これは、18世紀末、インド、北アフリカ綿が優勢になるまで、イギリスの輸入の半分以上を占めた。

こうしてイギリスの商船が、雑貨品や銃器を積んで西アフリカに航海し、奴隷を買ってアメリカ大陸に輸送し、売却して現地のサトウ、綿、タバコなどをヨーロッパに運んでもうけるという、いわゆる三角貿易のシステムが成立したのであった。

以上のように、大西洋は、中世末までの空白の海から、南北アメリカ大陸とアフリカ、ヨーロッパを有機的に結びつけ、ヨーロッパ人のために無限の富を生み出す、宝の海になった。1500年以後、ヨーロッパは、古代、中世には想像もできなかったような莫大な資産を大西洋世界から得たのである³⁴⁾。

ヨーロッパ人はこの新世界からの富を色々な目的に使うことができた。しかしそれをもっとも有効に使ったのは、イギリス人だった。彼らは、大西洋の三角貿易で蓄積した資本をアジアに投資した。オランダ人が東インドで昔ながらの香料にこだわっている間に、イギリス人はインドや中国で木綿布や茶を買い、ヨーロッパに運んでさらに大儲けをした。やがて彼らがインドやアメリカから輸入する綿で木綿工業をおこし、それを蒸気機関によって機械化して、産業革命の時代を迎えた。しかし、最初のはずみをつけたのは大西洋貿易だったのである。

もしアメリカ大陸がなかったら、歴史はこのようには進行しなかったろう。古代および中世の世界史は、インド洋＝南シナ海世界を中心に展開した。そしてその重心は中国にあった。しかし1600年以後の世界史は、大西洋世界を中

心に展開し、その重心は西ヨーロッパにあった。そこでわれわれは、先に述べたものとはちがう三つの同心円を描かなくてはならない。第一の円は、西ヨーロッパを中心にアメリカ、アフリカ両大陸を含みこんで大西洋を包摂する。第二の円はインド洋の大部分を覆う。そして第三の円は南シナ海と東シナ海におよび、日本を包み込む。この三つの同心円は、波紋を描きながら、はじめに述べた同心円の上にだんだんと重なり、やがて19世紀になるとそれにとって代ることになる。第一の円はいうまでもなく16世紀までに形をなした大西洋圏をあらわす。第二の円は、それがインド洋を覆い、イギリスの東インド会社が1765年にインドの行政権を独占した時点の状態をあらわす。第三の円はアヘン戦争後、一連の条約によって中国を半植民地化したときに輪郭を明らかにした。1856年、徳川時代末期の日本に到着したイギリス公使ラザファッド・オルコックは、「この国は、世界にめぐらされた大英帝国の連鎖の、ひとつだけ欠けた環だ」と言っている³⁵⁾。

こうして16世紀に大西洋システムとして始まったものが、世界システムとして完結したのである。

【注】

- 1) Fernández-Armesto, Felipe, ed., *The Times Atlas of World Exploration*, London, 1991 : 17.
- 2) Diffie, B.W., & Winius, G.D., *Foundations of the Portuguese Empire 1415-1580*, Minneapolis, 1977 : 75 ; Magalhães Godinho, Vitorino, *A economia dos descobrimentos enriquecidos*, Lisboa, 1962 : 214.
- 3) Boxer, Charles R., *The Portuguese Seaborne Empire*, London, 1973 : 20-23.
- 4) Peres, Damião, *História dos descobrimentos portugueses*, Oporto, 1960 : 320.
- 5) Morales Padrón, Francisco, *Teoría y leyes de la conquista*, Madrid, 1979 : 55.
- 6) Gil, Juan, ed., *El libro de Marco Polo*. Biblioteca de Colón I, Madrid, 1992 : 129.
- 7) Nowell, Charles E., *Magellan's Voyage Around the World*, Evanston, 1962 : 28 et seq.
- 8) 石田幹之助『南海に関する支那史料』東京, 1945 : 20-21.
- 9) F. W. ウォールバンク (吉村忠典訳)『ローマ帝国衰亡史』東京, 1963 :

- 135-137.
- 10) 藤本勝次訳注『シナ・インド物語』関西大学東西学術研究所, 1976.
 - 11) Fage, J.D., *Introduction to the History of West Africa*, 3rd ed., Cambridge 1964 : 9.
 - 12) 三上次男『陶磁貿易史研究』下巻, 東京, 1988 : 139,153.
 - 13) 藤善真澄訳注『諸蕃志』関西大学東西学術研究所, 1990 : 190.
 - 14) 斯波義信『宋代商業史研究』東京, 1968 : 1-3 ; McNeill, William, *The Pursuit of Power*, Oxford, 1982 : Chapter 2 The Era of Chinese Dominance.
 - 15) 松田寿男『アジアの歴史』東京, 1992 : 138-139 ; 江上波夫「中央アジアの民族的・歴史的環境と文化交流」, 江上波夫編『中央アジア史』東京, 1987 : 31.
 - 16) Lane, Frederic, *Venice. A Maritime Republic*, Baltimore and London, 1973 : 70-71.
 - 17) Lane, *op. cit.* : 128-129 ; McNeill, W., *Venice. The Hinge of Europe 1081-1797*, Chicago and London, 1974 : 36-37.
 - 18) Irwin, Robert, *The Middle East in the Middle Ages. The Early Mamluk Sultanate 1250-1382*, Carbondale and Edwardsville, 1986 : 73.
 - 19) Ashtor, Eliyahu, *Levant Trade in the Later Middle Ages*, Princeton, 1983 : 8-9.
 - 20) Praver, Joshua, *The Latin Kingdom of Jerusalem, European Colonialism in the Middle Ages*, London, 1972 : 393 ; Bautier, Robert-Henri, *The Economic Development of Medieval Europe*, London, 1971 : 107-109.
 - 21) Lane, *op.cit.* : 126-127.
 - 22) McNeill 1968 : 54.
 - 23) Lopez, Robert S., *The Commercial Revolution of the Middle Ages, 950-1350*, Englewood Cliffs, 1971.
 - 24) Diffie, Bailey W., *Prelude to Empire*, Lincoln, 1960 : 58.
 - 25) Scammell, G. V., *The World Encompassed. The First European Maritime Empires c.800-1650*, Berkeley and Los Angeles, 1981 : 179-182.
 - 26) Vicens Vives, Jaime, *An Economic History of Spain*, Princeton, 1969 : 336.
 - 27) Lewis, Bernard, *The Muslim Discovery of Europe*, New York and London, 1982 : 34.
 - 28) Heers, Jacques, *Gênes au XVe siècle*, Paris, 1971 : Deuxième partie, La vie économique.
 - 29) McNeill 1982 : 86-102.
 - 30) Chaudhuri, K.N., *Trade and Civilization in the Indian Ocean. An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1985 : 2.
 - 31) Souza, George B., *The Survival of Empire*, Cambridge, 1986 : 1-2.
 - 32) O'Gorman, Edmundo, *The Invention of America*, Bloomington, 1961.

- 33) José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias*, Sevilla, 1590. (『新大陸自然文化史』上・下 (増田義郎訳) 東京, 1965.
- 34) Davis, Ralph, *The Rise of the Atlantic Economies*, London, 1973.
- 35) オールコック『大君の都』下 (山口光朔訳) 東京, 1962 : 97.

The Age of Reconnaissance Reconsidered

Yoshio Masuda

When a group of Portuguese headed by Vasco da Gama sailed round the Cape of Good Hope and traversed the Indian Ocean to Calicut on the Malabar Coast in 1488, they fulfilled the centuries-old dreams of the Mediterraneans. As early as 2000 B.C., the people of the Mediterranean were reaching toward India and the Indian Ocean. The Phoenicians sent their fleet to the Red Sea, and the Greek merchants of Alexandria in Ptolemaic Egypt were actively engaged in trade with the Indian Ocean. The Romans, who were blocked from direct trade with Asia by the hostile Parthian Empire, were able to establish commerce with India through the Black Sea northward across the Caspian Sea, or by way of the Red Sea. Those ancients were interested in trade with India and other areas of the Indian Ocean because they coveted the marvelous products of the circum-Indian Ocean region. The Indian Ocean itself abounded in such valuable merchandise as spices, precious stones, ivory, coral, hawksbills, pearl, etc., but it was supplemented with silk and porcelain from China, which is closely connected to the Indian Ocean region through the South China Sea. Indeed, the Chinese had a great interest in extending their ties with the West. The Han Empire, founded in 206 B.C., endured four centuries and established a *Pax Sinica*, which stretched from China across Central Asia to the Caspian Sea. Here it came into contact with the Parthian Empire. This made

possible the opening-up of the great Silk Road from East to West, which contributed much to a mutual exchange of commerce and culture. At the same time, the Han Chinese thought much of the trade with Southeast as well as South Asian countries, and established the 'South Sea Province', with Kuangtung as its capital and principal trading port.

The T'ang dynasty was established in 618, and soon after that there was the rise of Islam in the West. For commerce and civilization in the Indian Ocean region, these separate events mark a fresh beginning. The new activity which became evident in the rhythm of both caravan and trans-oceanic trade from the seventh century onwards in northern and southern China, received a great deal of impetus from the economic development of T'ang society. The merchants of Siraf in the Persian Gulf organized their maritime fleet for voyages to India, East Africa and China. Big settlements of Persian, Indian and Jewish merchants sprang up in Kuang-tung. Also, Chinese junks sailed as far as the commercial emporia of the Malabar Coast in the later T'ang period. Those closer commercial relationships in the South China Sea-Indian Ocean area reached their apogee in the twelfth century, when the Sung Empire's rapid evolution toward market-oriented activities tipped a critical balance in the economy of the Indian Ocean. The scale of Chinese trade in the Indian Ocean seems to have spurred upwards from the middle of the eleventh century, as is evidenced by the tremendous amount of Chinese porcelain sherds found in Egypt, the East African coast and India. A similar upgrowth of commercial activity took place in the eleventh century in the Mediterranean, where the Italian merchants of Venice and Genoa took the lead. They in turn brought most of Europe into a closely articulated commercial net in the course of the next three hundred years. Evidently, this Mediterranean and European phenomenon is a response to the upsurge of the economy and commerce in the Indian Ocean

region, which in turn was stimulated greatly by the revolutionary growth of the Sung economy.

What is called the 'Age of Exploration' is nothing other than the extension into the Atlantic of the eruption of the economic forces stored in the christian Mediterranean world since the eleventh century. The protagonists were Portuguese and Spaniards, but their activities were financed mostly by the Italians, especially the Genoese. They opened up the 'Age of the Atlantic', which had been consigned to oblivion during the Middle Ages. The other European nations, after the Portuguese and Spanish, exploited the wealth of the both sides of this ocean, and knit four continents — Europe, Africa and the Americas — into an organic whole.

They accumulated wealth obtained from Africa and the Americas, and invested it for their commerce and political dominance in Asia. In the long run, it was the English who reaped the best harvest.